

## 「私」の形式的なかたち

－「構想力」による「超越論的」な「綜合」について－ （４）<sup>(1)</sup>

木阪貴行

### （２）内的触発と受動的主観

まずは、３章Ｂ（２）で引用した最初のテキスト（B153-4）の読解である。問題は、「悟性がその当の主観の能力であるところの、受動的な主観（[das] *passive Subjekt*, dessen *Vermögen* er [= der Verstand] ist）」という表現が何を意味するのかという問題である。

もしも引用テキストの意味することがらがいわば字義通りに、「受動的な主観」を、その「その当の主観の能力である」と定義される「悟性が」触発するということであるならば、それはなにがしか自己完結的な触発、つまり何らかの意味での自己触発となる。もしそうであるならば、３章Ｃ（１）で指摘した問題の①は、簡単に解消するかもしれない。つまり、カントの主観は純粋直観における多様なものを自己触発によってまったくアприオリに手に入れることができるというわけである。またこれとともに、同箇所では指摘した問題の②も、そのように自己触発によってアприオリに得られる多様なものによって、「形式」そのものを当の「形式」において表象することができることになるので、問題としては解消するだろう。また基本的にはこれと同じ、３章Ｂ（１）でより一般的に指摘した、統覚の「私」と、空間的形象を介して表象された内官の形式との、差異性と同一性の不分明さも、純粋主観の自己触発が自ら内官形式の表象を自己創出する、という仕方では解消すると考えなければならないことになるだろう。

確かにカントは、自己触発のパラドックスについて語り、また「私」が「私」自身に対して如何にして直観と内的諸知覚の客観でありうるのかという「困難」について語ってはいたが、しかしながらそれでも、「実際にそうでなければならない」ということを承認する他はない、と議論していたので

ある。だが、その場合に承認されなければならない「実際」の事態とは、たとえ純粹直観のレベルであっても、上のように純粹直観における多様なものを自己触発によってまったくアプリアリに手に入れることができる主観、つまりそのような質料までもアプリアリに自己産出する主観をも、含意しているのだろうか。これが問題である。

前回までの研究で明らかになったことを確認しよう。カントが「パラドックス」はないとする根拠は、厳密な意味での自己触発なるものはむしろ存在せず、それにもかかわらず、むしろある種の事実として自己が現象として認識されることを承認しなければならないからであった。仔細には、「私達が内的に私達自身によって触発される」と言えるのは、「内官の諸規定も、外官の諸規定を空間において秩序づけるのとまさに同じ仕方では時間における現象として秩序づけなければならない」からなのであり、それがゆえに自己触発ではなく、内的触発が存在すると言えるのみである。そして我々の理解では、内的触発において触発される仕方は、「外官の諸規定」が「空間において秩序付け」られうるように触発される「のとまさに同じ」なのであった（3章B(2)）。

外的な現象、つまり物理的事物の現象は、当然ながら空間規定のみから成立しているのではなく、必然的に時間的変化とともにある。時間と空間がともに必然的に外的現象の感性的形式である。我々はこの基本的な事態から、「外官の諸規定」が「空間において秩序付け」られうるように触発される「のとまさに同じ」である内的触発の在り方を考えなければならない。そもそも外的現象において、時間は如何なる意味でその必然的な形式であるのか。

触発において与えられる所与は、それだけでは、前回研究で示したように、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉における所与でしかない。たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉と不可分のものとして生起している統覚、つまり現在に現前している統覚は、何らかの経験的表象を機縁に生起しているのであった。そこでその第一の所与たる経験的表象は統覚の自発的思惟が生起するための「条件」として与えられていなければならないのであった。生起しているたんに〈常に今〉でしかないような〈今〉が、この意味でたんに持続する〈今〉であるかぎり、そのような〈今〉においては、自発的な統覚は「空間における何か持続的なもの」とこの持続において共在していると言っていいか

もしれない<sup>(2)</sup>。ただしそれだけのことで、物理的世界の客観的時間経過の中に「規定」される「現象」は成立しない。そのためには、持続的なものが運動するという事態が把握され、それが認識に取り込まれなければならない。このことがカントの立論ではどのように理解されていることになるかを考えてみよう。

時間と空間がそれぞれ異なった仕方で感性の形式であるというカントの立論では、運動は空間において生ずるという単純な言い方ができない。それは、外官の形式である空間においてであるとともに、内官の形式である時間において生ずるということになるからである。物体の運動に何故に内官が関わるのか。このことの意味をより明らかにするために、感性論及び観念論論駁のそれぞれから以下のテキスト（後者についてはカント自身が第二版序文で補筆訂正したもの）を取り上げよう。

それゆえ、時間はあらゆる現象一般のアプリオリな条件である。詳しく言えば、内的（私達の魂の）現象の直接的条件であり、まさにそのことによって間接的にまた外的現象の条件でもある。（B51）

しかしながらこの持続的なものは私の中の直観ではありえない。なぜならば、私の中において見出されうる、私の現存在（mein Dasein）のあらゆる規定根拠は、表象であり、そのようなものとして表象それ自身が当の表象から区別される持続的なものを必要とするから。表象の交替、つまりそこにおいて表象が交替する時間における私の現存在は、この持続的なものとの関係において規定されることが可能なのである。（B Vorrede, XXXIX, Anm.）（強調はカント自身。引用内強調について以下同様。）

前節（3章C(4)）で引用して確認したように、超越論的統覚あるいは悟性による結合作用のない状態では、「内官」は「直観のたんなる形式」にすぎず、「規定された直観」を含まない。この状態が、たんに<常に今>でしかないようなく<今>である。ところが、上の観念論論駁のテキストによれば、「時間における私の現存在」とはつまり「表象の交替」である。すなわち内官における私の現存在とは「表象の交替」という事態であるということになる。時間において表象が交替するということは、今し方あった表象が今はなくなって別のものとなっている、ということではありえない。この事態は、たんに

〈常に今〉でしかないような〈今〉に、常にすでに見出される原的な所与と言わなければならない。その具体的な関係規定は必要ないが、〈今〉は常にそれより以前の別の〈今〉との何らかの関係にあるものとしてしか生起しないからである。〈今〉の可能性の条件には、この何らかの関係が含まれる。統覚による結合によって客観的時間における「規定された直観」へと総合されうるためには、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉においてさえ、表象の交替を可能にしている時間の形式のみを含み、とはいえ悟性による結合は見出すことができないような、原的な所与がなければならないのである。

引用テキストから分かるように、カントの把握の仕方では、「表象」は内官において上の意味で常に変移交替している。そして空間における持続するものは表象ではない。表象とは区別される、何か持続的なものが存在しなければならず、それは外官によって確保される。これに対して内官は、最低限、「内的（私達の魂の）現象の直接的条件」である時間形式を含んでいる。具体的に言い換えれば、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉には、空間における何らかの持続するものにおいて今し方あった表象が今はなくなって別のものとなっている、ということが常に伴っているのである。

さらにカントによれば「異なる諸時間は同時的ではなく継時的」であり、「異なる諸空間は継時的ではなくて同時的」である(B47)。ところで一般に運動とは、異なる諸時間における物体の空間位置の交替である。すると空間における何か持続的なものの運動に関わる表象の、継時的にのみ生じうる交替は、「継時的ではなくて同時的」である「異なる諸空間」のみではどのようにしても不可能であり、「内的（私達の魂の）現象の直接的条件」を含む内官、つまりそこにおいて今し方あった表象が今はなくなって別のものとなっている、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉を、經由するより他はない。

とはいえやはりカントに従うかぎりには、逆に内官のみ、つまり時間のみにおいては、交替するバラバラの表象が継起するのみである。つまり、有から無に消え去る表象はそのように表象として生起消滅するのみであるから、悟性は、同一の持続するものにかんする表象としてこれを結合することができない<sup>(3)</sup>。

再び確認すれば、外官のみにおいては、つまり同時性の秩序である空間のみにおいては、運動は成立しない。それどころか、「変化という概念、それ

とともに運動という概念（場所の変化としての）は時間表象を通してのみ可能である」（B48）。しかも、3章C(4)の引用によれば、「さらに時間そのものでさえも、直線（時間の外的に形象的な表象であるべき）を引きながら、それによって内感を継起に規定するところの多様の綜合の働きに注意し、またそのことによって内感におけるこの規定の継起に注意することなしには、表象することはできない」（B154）。内官を経由して、つまり、そこにおいて今し方あった持続的なものの表象が今はなくなって別のものとなっている、たんに〈常に今〉でしかないようなく今を経由して、それも実は直線を描く運動において把握されるような「時間表象」によって、持続的なものに関する表象を規定するときにはじめて、客観的な運動が把握される。内官は原的所与においては何ら規定されていないが、この当の所与は統覚ないし悟性の結合作用によって規定されることになる。

こうして、時間と空間における物体の運動を現象として客観的に認識するためには、内官の形式である時間と外官の形式である空間とが、緊密な仕方ですべてに協働することによってのみ、統覚ないし悟性は表象を結合することができるということが分かる。

以上をまとめると、内官には、たんに時間の形式のみを含み、統覚ないし悟性による結合を得ていない原的所与が存在するが、これを結合するための基礎には、それとの連関でのみ表象の交替が把握されうる、空間における何か持続的なものの運動を必要とする、ということになる。

さて、これらのことを念頭に置いて最初のテキスト(B153-4)に戻ろう。まず、「内官が触発される」とは統覚ないし悟性によるこの結合作用を指している。ただし、既に3章B(1)で確認したように、結合作用が内的触発と言い換えられるのは、作用が自己に対して行使されるからそれは同時に自己に対する触発ということになる、つまり自己触発となるという理由からではなく、あくまで「内官の諸規定も、外官の諸規定を空間において秩序づけるのとまさに同じ仕方で時間における現象として秩序づけなければならない」からなのであった。このことの意味を上の物体運動の客観的認識の在り方を敷衍して明らかにし、自己完結的な自己触発が存在しないことを再び確認しながら、問題の「受動的主観」の身分を位置づけよう。

「内官の諸規定」を「外官の諸規定を空間において秩序づけるのと同じ仕

方で」秩序づけるのは、具体的には、「形象的綜合」つまり「構想力の超越論的綜合」である。この文脈で「構想力とは、対象をその現前なしにも直観において表象する能力である」とされている(B151)。「現前なし」の「対象」とは当該文脈では何を指すことになるか考えてみよう。すると、以下のことを否定できないと思われる。すなわち、「内官の諸規定」を秩序づけるとは、今し方あったが今はなくなって別のものとなっている表象を、「その現前なしにも直観において表象する」ことを少なくとも含んでいなければならないということである。実際、外官のみ、つまり「同時的」秩序でありうるのみの空間形式だけでは、運動は成立しようもない。「内官の諸規定」を「外官の諸規定を空間において秩序づけるのとまさに同じ仕方で時間における現象として」具体的に規定するためには、すでに消失している「表象」との関係において運動の把握を成立させる「構想力の超越論的綜合」つまり「形象的綜合」がなければならず、これが内的触発なのである。

すると、「受動的主観」とはすでに存在しない表象を現存させる内的触発の機制に関わる文脈で主題化されている主観でなければならない。それゆえ「受動的主観」は純粋な主観の在り方であることはできない。なぜならば、純粋な主観の一般的な在り方にのみ依拠する自己触発では、今し方あったが今はなくなっている表象、つまり自己とは異なる他なる表象という所与を確保できるとは考えられないからである。もしも内的触発が純粋な主観の在り方にのみ依拠する完結した自己触発であるとすれば、それはたんにアプリアリな次元で、内官における表象の交替と、その表象が関与している外官における何らかの持続的なものを産出することができるものでなければならないこととなる。そうなると質料面からもアプリアリに時間と空間とを自己産出する主観が考えられていることになるが、それはもはやカント的な有限主観ではなくなってしまうだろう。

すると「受動的主観」は以下の如くに性格付けられる。すなわち、すでに消失しているが、内官を経由することによってのみ「構想力の超越論的綜合」が「その現前なしにも直観において表象する」ところの、具体的な近接過去が主題化されている場合に、それは、「触発」という仕方では把握される当該事態に内含されるそのような近接過去の指標でなければならない。それゆえ「受動的主観」とは、それを介してのみ、すでに消失した具体的表象を、

「その現前なしに」、それにも関わらずたんに〈常に今〉でしかないような〈今〉としての内官において表象する、つまり「直観において表象する」ことができるような、現前の場に対してあくまで他在で既在の主観でなければならない。

引用テキスト(B153-4)では、「構想力の超越論的綜合」という「名称のもとに」「働きを行使」するのは「悟性」である。これによって「内官が触発される」と「正しく言える」のであった。この文脈では、「悟性」とは、この触発における「働きの行使」の側、自発性の側の指標である。これに対して「受動」性は、すでに消失した表象の「現前」に関わる機制の指標である。これらが「形象的」に連関する次元が、「構想力」の次元である。

さらに以下のことを忘れてはならない。それは、この「働きの行使」つまり形象的な内的触発によって内官がカテゴリーを通して規定されるということは、3章C(4)で引用したテキストでカントが強調していたように、「継起の概念さえもはじめてもたらす」という事態なのであり、つまりそれは「多様なもののすでにある結合を見出す」のではなく、「結合をもたらす」という点である。結合されるべき表象は、現前性という点からすればすでに近接過去へと消失している。これを新たに現前させるのは、内的触発、つまり「対象その現前なしにも直観において表象する」「構想力の超越論的綜合」である。ただし当該文脈においてこのことは、経験的な連想のみに関わる「再生的構想力」によって可能になることではない。「再生的構想力」はたんにそれまで反復された秩序に依拠する経験的法則にのみかかわる。これに対して、内官の形式のみしか含まない所与、つまり、今し方あった表象が今ではなくって別のものとなっているということが常に伴ってはいるのだが、具体的な継起の系列としては何ら結合されていない、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉を、そもそもはじめて具体的な継起系列の中に規定する働きは、そのような経験規定に先だって、当の規定可能性をまず産出する。つまり「継起の概念さえもはじめてもたらす」のである。それは客観的な時間秩序をはじめて成立させる、この意味でアプリアリな機制に関わる「産出的構想力」の働きでなければならない<sup>(4)</sup>。「再生」とはすでに反復された秩序における何らかのことがらの再生であるしかないが、そのような「再生」は、すでに客観的な秩序が存在し続けていることを前提にしている。これに対し

て「産出的構想力」はその都度アプリオリに、当の秩序をいわば無から産出創成するのである。

以上のことから、具体的に3章C(1)で指摘した問題の中、①に対しては以下のような回答が得られたことになる。つまり、カント的主観は純粹直観における多様なものを自己触発によってまったくアプリオリに手に入れることができるわけではない。なぜならば、統覚ないし悟性にとって原的な所与である、表象の交替を可能にしている時間の形式のみを含み、とはいえ悟性による結合は見出すことができないような所与は、これを統覚が自発的に自らに与えることなどできないからである。統覚の純粹な自発性は、3章B(2)で引用した四つめのテキスト(B423-4, Anm.)によって何度か主張してきたように、「思惟の材料を与える何らかの経験的表象」なしには生起しないのであったが、我々が新たに理解するところでは、その「経験的表象」とは、表象の交替を可能にしている時間の形式のみを含み、とはいえ悟性による結合は見出すことができないような、如上の原的な所与に他ならない。

明らかなように、この回答は、我々が3章B(2)で引用し、その後それに依拠する議論は展開したが、しかしその内実に関して事態を仔細には解明することがまだできなかったこの四つめのテキストの具体的な読解である。またさらに、同箇所と同じ問題事象を示すために引用しておいた三つめのテキスト(B158, Anm.)の読解でもある。すなわち、「時間」においては「規定されるもの」がこの規定されるということに「先だって」「与えられ」るのだから、この「規定されるもの」の所与とは、やはり表象の交替を可能にしている時間の形式のみを含み、とはいえ悟性による結合は見出すことができないような、直接的であり未だ規定されていない原的な所与なのである。

ところで、以上の回答は、カントの主観は純粹直観における多様なものを自己触発によってまったくアプリオリに手に入れることができるわけではない、ということを主張するものではあっても、3章C(1)で指摘した問題の②に関わる事態と齟齬するものであってはならない。すなわち同箇所引用したテキスト(B160)に従い、「感性的直観の形式」を「当の感性的直観の形式において」「アプリオリに表象」という事態は確保されなければならないということである。この点は一見すると困難な課題であるように思われるかもしれない。そこで、次にはこの問題②を解決しなければならない。その



ことは、3章B(1)でより一般的に指摘した、統覚と空間に現象する形式との不分明な関係を明らかにすることにもなる。「アプリアリに表象」される時間と空間は、如何なる意味で統覚における「私」と連関を有しているのか。以下に節を改めて考察しよう。

### (3)形式と直観

この問題は、やはり3章B(2)で引用したテキスト(B69)の読解の問題でもある。問題は、内官の「形式」そのものを当の内官の「形式」において如何に表象することができるのか、あるいは、如何にして「心が自らに」「心が内的に触発される仕方にしたがって」「現象する」ことができるのか、ということである。内官という形式の、内官という形式そのものにおける自己映現は、なにがしかの矛盾を含むような自己関係性となってしまうのではないのか。

この問題を考えるためには、客観的な時間形式とは、時間計測の形式であるという点を念頭に置く必要がある。つまり内官が触発されるということは内官において継起の概念が始めて成立することであるという場合、典拠としては例えば3章B(1)で引用した三つめのテキスト(B156)によっても明らかのように<sup>(5)</sup>、その継起とはすでに単位の成立を含んでおり、そのような時間計測の単位とはつまり比量の基礎であるという点である。実際ここまでずっと考察してきた文脈では、「継起」とはたんに近接過去が消滅しているということから把握されることではない。消滅した近接過去と現在との関係を客観的に「規定」することが問題とされてきたのであり、それはより具体的には計測の可能性を与えるものでなければならないのである。

ところで時間計測における単位とは、内容的にはどのようなこととなるのだろうか。カントのテキストはこの点をなんら詳細には記述していない。それゆえ、時間の計測ということ一般について我々がその内実を補足して考えなければならない。

さて、時間を直線運動において表象する場合に考えられているのは一様な運動である。この運動は一様な速さを有していることになるが、その一様な速さが時間それ自体を示しているわけではない。というのは、何らかの仕方では時間を示してはいるはずのこの一様な直線運動の速さも、速さとしてはそれ自体時間を介して計測される対象であり、計測尺度の基礎に関わる時間

そのものではないからである。この意味でカントの言うとおり、「時間は知覚の対象ではない」(B245) のである。では、時間を計測する際にその比量の基礎となるべきものとしての時間尺度は、どのようにして得られるのか。

まず我々の用語で比量とは、同一の形式を介して重ね合わせることのできる量を、この重ね合わせを介して数えた数量のことである。当然この数量は、自然本性上別の個体、つまり、自然本性上数的に別のものの数ではない。むしろ比量によって計測される時間は、常に同一の何かでなければならないが、カントに従って我々の場合にそれは主観の形式である。上で見てきたとおり、今し方あった表象が今はなくなって別のものとなっているということが常に伴ってはいるのだが、具体的な継起の系列としては何ら結合されていない、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉という常に同一の形式である。当然ながらこれは何らかの自然的個体から成立するようなものではない。一般的に言っても、比量の単位とは人為的に設定される量であり、自然的な個体でないことは自明であろう。比量によって計測される時間も、もちろん集合における自然的個体の数ではない。形式としての時間から区別される数量としての時間の成立とは、同一の形式を介して人為的に設定される量の重ね合わせにおいて、測る側の時間単位の量と測られる側の時間の量とが、数量として初めて一気に相即的に成立するということである。主観の形式である時間は、形式として未だそのような数量ではない。

時間計測とは、特定の運動が生じていたあいだを計測することである。時間計測における比量の単位が与えられるということは、この計測する側の時間、つまり単位となるあいだと、計測される別のあいだとの両者が、比量によって同時に相互的に規定されるということである。時間計測の単位自身も、それ自身が他を計測することによって他と相互的にのみ初めて比量となる。

計測するという機能、量を数えるという悟性的な機能の観点から見ると、その単位となる量は比量の基礎として論理的に要請される量である。そして、特定の事象の計測について、その計測における比量の基礎となる量が具体的に何であるかは、当の比量によって規定される数値、つまり比それ自体によっては与えられない。そこで計測されているのがどのような量であるのか、それは実体験において了解されるしかない。時間の場合、それは持続するものの運動において体験されるある一定のあいだである。カントの立論では、

このあいだは、外官、つまり空間という形式において見出される持続するものと、内官、つまり時間という形式における表象の変移交替とが、一体のものとして体験されることによって了解される。上で見てきたとおりである。

ところで、このような体験は、上で見てきたような原的所与、つまり表象の交替を可能にしている時間の形式のみを含み、とはいえ悟性による結合は見出すことができないような、直接的原的所与においては成立していない。今し方あった表象が今はなくなって別のものとなっているということが常に伴ってはいるのだが、具体的な継起の系列としては何ら結合されていない、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉を、構想力の超越論的綜合によって結合し、具体的な継起系列をそもそもはじめて成立させ、その系列の中に具体的な位置を与えることによって、あいだは、そもそもはじめて時間規定として確定される。この結合はより詳細には以下のような事態である。カントの立論に従いながらさらに仔細を補足しつつ記述してみよう。

空間における何らかの持続するものに関して変移する表象に注意が向けられているかぎり、統覚の自発的意識は「空間における何か持続的なもの」とこの持続において共在していると言える。だがこのことだけでは計測に不可欠な比量を成立させるような時間秩序に至ることはできない。比量が可能であるためには、同時に持続しつつ運動する、比べられるべき複数のものに関して、それぞれ変移する表象が必要であるかもしれない。実際、空間には確かに複数の持続するものが同時に存在するだろう。だが一般的に言っても、有限な意識という我々の認知の在り方においては、複数の異なるものに同時に注意を集め、それゆえそれらを字義通り同時に、つまり一気に把握するということは不可能である。異なる対象については、その各々について継時的に次々と注意するより他はない。カントの表現に従うならば、前節で見たように、時間は「内的（私達の魂の）現象の直接的条件であり、まさにそのことによって間接的にまた外的現象の条件でもある」ということである。つまり、カント的な内官の形式である時間は、「直接的」には継時的でしかありえないのである。それゆえ時間という形式、つまり内官の形式においては同時ということが成立しないから、あくまで内官ないし時間において比量が可能となるためには、継時的に生じていて、それゆえすでに消滅しているものを「その現前なしにも直観において表象する」「構想力の超越論的綜合」に

よって「はじめてもたらす」ことが必要となる。これこそがアプリアリな「産出的構想力」のこの文脈における機能でなければならない。

すると、比量が成立するのは、持続する同一の運動における近接過去と現在性との継起的生産においてでしかありえない<sup>(6)</sup>。注意すべきことは、この時間秩序の創成は、そこにおいて今し方あった持続的なものの表象が今はなくなって別のものとなっている、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉、つまり、時間の形式のみでは成立しないということである。時間の形式そのものの中には、比量関係が、アプリアリにかついわば分析的に刻まれているわけではない。比量関係は、外延量を分割しつつそれと単位量とを重ね合わせるということを継的に実行してその数を数えるという総合によってのみ可能である。つまり時間を形象化して、その形象化されたものを分割しつつ、質的には同じであり、ただ量としての大きさのみが異なる、換言すれば、その意味で計測される量と相似の、単位量によって、継的に数えることによるのみ可能である。このように数えるということは、内官、つまり時間の形式そのものに最初から刻み込まれているわけではない。直接的な原的所与における内官の形式は、今し方あった持続的なものの表象が今はなくなって別のものとなっている、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉であるのみなのであるから。

以上により、我々は問題に対して以下のような回答を得たことになる。

まず、内官という形式の、内官という形式そのものにおける自己映現は、循環ないし矛盾に陥らないような仕方では以下のように成立する。——空間における持続的なものの様な運動を念頭に置こう。すると、この運動において今し方あったがすでに消失している、持続的なものの表象の変移を、それによって計測する単位量として、「構想力の超越論的総合」によって「その現前なしにも直観において表象」しながら、これを現在において現前している、質的には同じであり、ただ量としての大きさのみが異なる、その意味で単位量自身と相似である、計測されるべき別の量に継的に重ね合わせつつ数えることにより、内官形式において「その現前なしにも直観において表象」されている単位量（あいだという、空間において運動するものの表象変移におけるある持続）が、当の内官形式において自己映現する。1, 2, 3, …と数えるとき、最初の単位量1が、数えられるあいだに次々と自己映

現していく。自己映現とは決して自己触発ではない。ここで自己映現とは、二つの相似する時間の、同一の時間形式を介する重ね合わせである。つまり、まず「私」の内官の形式という同一形式に支えられるある時間内容が、この形式においてすでに既在という他在となっているという事態があり、そのように既在としてすでに消失したあいだが、数えられるべき、現在現前している別のあいだに、「私」の内官形式という両者同一の形式において重ね合わせられる。数える単位量と数えられるあいだとの関係は、相似の関係であるが、二つの量を関係付けてこの比を可能にする同一の機制が、なんらかの経験的表象が与えられている内官の形式としての時間である。つまり、今し方あった表象が今はなくなって別のものとなっているということが常に伴ってはいるのだが、具体的な継起の系列としては何ら結合されていない、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉である。この〈今〉が具体的な継起の系列としては何ら結合されていないと言えるのは、そこには最初から計測された結果が刻まれているわけではなく、むしろこの結合とは、悟性が、二つの量をその相似に従って「構想力の超越論的綜合」により重ね合わせることににより、「はじめてもたらす」ものであるからである<sup>(7)</sup>。

すると、具体的な継起の系列としては何ら結合されていない、たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉は、内官の形式において与えられている何らかの経験的表象を契機として生起しているのだが、それにもかかわらず、「感性的直観の形式」を「当の感性的直観の形式において」「アприオリに表象」すると述べることができる。なぜならば、経験的表象が与えられている内官形式としての時間には、それが直接的な所与であるかぎり、すでに消失した近接過去との関係一般は含まれてはいるが、つまり、すでに消失したものに継起している〈今〉であるということは含まれてはいるが、この関係性は未だ、相似なるあいだという量のあいだの比として成立する数を含んではないから。この二つの量の比としての数は、数えるという悟性の働きにより、「その現前なしにも直観において表象する」「構想力の超越論的綜合」によって「はじめてもたら[さ]」れる。つまり「アприオリに表象」されるのである。純粹直観としての時間とは、時間形式の自己映現であるこの「アприオリ」な「表象」に他ならない。それは数えるという計測行為をはじめてアприオリに可能にする統覚ないし悟性の機能の所産である。計測の秩序がすでに刻

みこまれている純粹直観という何かアプリオリな所与が最初から与えられているわけではない。それは主観の機能によってその都度に産出されなければならない数的秩序なのである。

これが我々の第二版演繹論理解と符合することは見やすい。カテゴリーの演繹とは、純粹直観として形式的直観自身を「感性的直観の形式においてアプリオリに表象」する遂行的確証であった。純粹直観は計測の絶対的基準を与える絶対時間や絶対空間ではなく、内官と外官という主観の感性形式において現象する運動内部の相対的な比量において、カテゴリーというアプリオリな機制によってその都度反復して産出されなければならない、主観の形式的秩序なのである。それは計測する「私」の内官の自己映現であり、この意味で現象する、「私」の形式的な形である。

統覚と空間に現象する直観形式について3章B(1)では不分明と見えた関係も以上のことにより明らかになる。直線運動を介して「アプリオリ」に表象される純粹直観である時間は、統覚の自発的機能である数えるという計測機能の所産としてのみ成立している。このことが、統覚と、空間に現象する直観形式の関係を与えているのである。注意すべきなのは、自発的機能の所産であるかぎりの時間直観ではなくて、そのような所産を生み出す自発的な機能であり、我々はこの自発的機能においてしか時間直観を手にすることができないという点である。3章C(4)で引用したテキスト(B154)では、「空間を捨象して、それによって内官を規定する働きのみに注意するならば」という限定のもとに、「悟性は多様なもののすでにあるそのような結合を内感において見いだすのではなくして、内感を触発することによって結合をもたらす」とされていたのである。すでに3章B(1)で見たように、内的触発においては自発性と受容生が交錯するが、計測の基礎となる秩序である時間直観については、そこに刻まれるべき「結合を内感において見いだすのではない。むしろ「内感を触発することによってもたらす」自発的機能こそが肝要なのであり、それこそが内官触発の機能である。

統覚ないし悟性の自発的機能である内官触発は、形象的な比量の秩序をこのようにアプリオリに産出する。ただしそのことは、アプリオリなこの産出が、経験的な場面とは別の純粹な場面でそれ自体として生ずるということでは決してない。この点は重要である。純粹直観なるものはそれ自体として与

えられているわけではない。それは経験の場面で常に新たに産出されなければならない。たとえ純粹直観を「アприオリに表象」する場合であっても、所産が現象する「空間を捨象して、それによって内官を規定する働きのみに注意する」ことが不可欠なのである。純粹直観は、それを「もたらす」主観の機能をその遂行において常にその都度反復し、しかも所産を「捨象する」ことによって遂行機能そのものに「注意する」ときに把握されるような、主観の自発的機能を基礎にして、初めて把捉される。純粹直観は計測の秩序として経験のその都度にアприオリに産出されるのであるが、それは経験の質料的内容を「捨象」することによって同時にそれ自体としても把捉される。純粹直観は、それが感性の形式と悟性の機能との統一によって成立しているという根本から分離され、特に直観としてのみ主題化されるときには、主観の機能が具体的に働いている場面を等閑に付し、本来は「捨象」されるべき所産の方に関心が移ってしまっているという意味で、むしろ逆に非本来的なある種の抽象物として理解されるべきであろう。この意味では、一様な直線運動を介し、時間直観という計測の秩序として空間に類比的に現象する直観形式は、逆に「空間を捨象して、それによって内官を規定する働きのみに注意する」ときにこそ、計測主体である統覚の作用の、時空的現象として理解されると言ってよい。我々の表現で、＜「私」の形式的な形＞である。

統覚の機能は、経験的場面からのこのような「捨象」を介するならば、純粹直観のアприオリな表象作用において把捉される。この場面では自発性と受動性が触発という事態において交錯する。それゆえ、このような交錯において「実際に」（既に3章B(2)で引用したテキストB156）、「心が自らに」「心が内的に触発される仕方にしたがって」「現象する」（同様3章B(2)、B69）と述べるのである。

さらにそれとともに、もう一つの重要な交錯もその在り方が明らかになって来る。経験的なものと、「捨象」によって把握されるアприオリな作用に基づく純粹なものとの交錯である。最後に、このことに関して当該テキストの読解において必ず問題とされる一つの焦点を我々の成果から考察しておこう。3章B(2)の引用テキスト(B423-4, Anm.)における「経験的」と「知性的」の交錯である。カントはそこで統覚命題が「経験的命題」であるとともに、統覚の表象それ自体は「知性的」であると言う。ここに矛盾ないし齟齬

はないのかという問題である。その部分のみを再度引用しよう。

「私は考える」という命題を経験的命題と名付けるとき、そのことによって、この命題には経験的表象が存すると言いたいのではなく、むしろ、その表象が純粹に知性的だと言いたいのである。

統覚命題それ自体が「経験的」であるのは、それが経験の必ず個別的な場面で生起する他はない統覚の作用を表現しているからである。この点について我々は前節末尾で、3章B(2)で引用したテキスト(B423-4, Anm.)による、「思惟の材料を与える何らかの経験的表象」なしには統覚の思惟が生起しないという論点を、新たに、この「経験的表象」とは、表象の交替を可能にしている時間の形式のみを含み、とはいえ悟性による結合は見出すことができないような、前節で詳しく論じてきた原的所与に他ならない、と結論付けている。

ところでそれにも関わらず、この場面に計測の秩序を「はじめてもたらず」統覚の自発的作用はアプリオリであるしかない。なぜならば、我々の理解によれば、原的所与が直接的に与えられる、「規定された直観をまったく含んでいない」たんに〈常に今〉でしかないような〈今〉には、計測を可能にする比量的秩序は刻まれておらず、計測を可能にする比量的秩序は、時間を数えるという作用の遂行においてむしろはじめて創成されるからである。この遂行は、経験のその都度実行され、そのことによって計測の可能性を与える秩序が、その都度経験それ自体に先だち、つまりアプリオリに、創成される。統覚命題における統覚の表象は、そのようにアプリオリで自発的な機制に関する表象なのである。それゆえ、統覚命題が「経験的命題」であるとともに、統覚の表象それ自体は「知性的」であって何ら差し支えはない。

以上により、3章B(2)において引用した問題の諸テキストは我々の成果によりすべて読解されたこととなる。（統）

#### 註

(1) 今回の研究では、前回に提出した第二版演繹論の解釈までの論述を承けて、それを発展させながら、3章において指摘した問題を引きつづき考察する。以下に前号までの掲載紙と目次を記す。

(1) 人文学会紀要第34号(P29～P43) 2001, 12



## 「私」の形式的なかたち（木阪）

### 序

#### 1 自発的思惟の「度」とその背後

##### A 「唯心論」と「唯物論」

##### B 「魂」の分割と統合

#### 2 「唯物論」の可能性と心身の協働に関する無知

#### 3 カント的自我の諸相とその問題

##### A 自発性の意識と、それに対して感性の受容性に属する「私の現存在」

#### (2) 国士館哲学第6号(P6～P23) 2002, 3

##### B 現象としての自我

##### (1) 内的かつ形象的な「触発」

##### (2) 自我概念の薄弱と、現象としての「私」という事実

##### C 統覚の総合的統一と構想力による総合的形象的統一（第二版演繹論の結構）

##### (1) 演繹の端緒

#### (3) 国士館哲学第7号(P40～P56) 2003, 3

##### (2) 第二版演繹論前半の議論と限界 — 自己が自己である権利と必要

##### (3) 証明と循環の間

##### (4) 遂行的確証としての第二版演繹論後半の議論

#### 4 自己と世界

##### A 内的触発と現象としての自我

##### (1) 自己認識の構造

#### (4) 国士館哲学第8号（本論文）

##### (2) 内的触発と受動的主観

##### (3) 形式と直観

- (2) 本稿末尾4章A(3)で見ると、我々の理解によれば、カントにとって「私は考える」という統覚命題は、このように空間における持続的なものとの共在においてしか生起しないがゆえに「経験的」である。それにもかかわらず、統覚の働きそれ自体は自発的であり「知性的」である。カントにとってこれらのことは何ら齟齬ではない。やはり議論を先取りした上でカント的な立場を鮮明にすれば、もしもこの持続的なものが一切運動変化しなければ、運動を介してのみ計測可能な秩序となる時間秩序は成立しない。カント自身は計測の対象とはならないようなたんなる持続に言及することはなく、それゆえもちろん統覚の時間構造としても決して議論しない。空間においてこそ持続するものが存在するが、統覚はそのような意味での持続をも獲得することがない。統覚命題が「経験的」であるのは、

## 「私」の形式的なかたち（木阪）

統覚そのものが、そのような仕方、で、持続する空間的事物の経験的表象を「条件」に生起しているからである。それにも関わらず生起している統覚自体は自発的で「知性的」でありうる。だがその「知性的」な統覚は持続的であるということではできず、それゆえもちろんそれは実体ではない。我々の理解によれば、それは生起するのみである。

- (3) これらの点については、第二版序文における記述が明確である。「現存在における何か持続的なものの表象は持続的な表象と同一ではない。なぜならば、表象は、我々の表象や物質の表象でさえもそうであるように大変に変移交替するものでありうるが、しかし何か持続的なものに関係しており、それゆえその持続的なものはあらゆる私の表象と区別される外なるものでなければならぬが、その外なるものの実存 (Existenz) は私自身の現実存在の規定に (die Bestimmung meines eigenen Daseins) 必然的に含まれておりそれゆえこれとともに唯一の経験をなしている。この経験は同時に (部分的には) 外的なものでもないのなら内的にも成立しないだろう。」 (BxLI, Anm.)

- (4) 我々の理解するところ、「産出の構想力」とは、統覚ないし悟性の自発的な作用のもとに、内官の形式である時間を、経験にその都度先立つという意味でアプリオリに、直観として形象化する能力であることになる。内官形式の形象的直観化は、感性にも悟性にも欠けている、「対象をその現前なしにも直観において表象する能力」である構想力による他はない。続稿でこの点から「超越論的観念論」の意味を考えることになる。

- (5) 再度必要な部分のみを引用しておく。「私たちは、外的直観の対象ではとにかくまったくなくような、時間を、私たちがそれを引くかぎりの線の形象のもとにおいてしか、表象することができず、そのような表現の仕方なしには、時間を計る単位を得られないだろう。」

- (6) この継起的生産は、いたるところ相似であるような、それゆえに連続的である (次註参照のこと) 時間表象における形象を分割しつつ、算術の基礎である自然数の秩序に従って、この形象を数えることによる。3章C(1)で見たように、数学と幾何学の物体への適用可能性を明らかにすることは、純粹直観の経験的直観に対する必然的妥当性をカテゴリーの機能によって明らかにすることであった。実際に以下に見るように、これらはともに次のことによって明らかとなる。つまり、空間における持続的なものの一様な運動において、カテゴリーを介してそれを数えることにより単位を産出する作用が、時間直観が時間形式において連続量として映現することを可能にすることによってである。

- (7) このような相似の構造が、単位であるべきすでに消失したあいだとしての時間と、それによって数えられるべき、現在現前している別のあいだとの、二つの量を関係付けて計測における比を可能にする。そして構造のこの相似は、なんらかの経験的表象が与えられている内官の形式としての時間、つまり、今し方あった表象が今はなくなって別のものとな

## 「私」の形式的なかたち（木阪）

っているということが常に伴ってはいるのだが、具体的な継起の系列としては何ら結合されていない、たんに<常に今>でしかないような<今>であるという常に同一の機制によって成立している。内官のこの形式が現象一般の「直接的条件」であるかぎり、時間系列は至るところで相似であり、それゆえ直線としての時間の連続性が帰結する。こうして、相似という事態の基礎、そしてそれゆえに直観の連続性の基礎は、「内的現象」の「直接的条件」である内官形式にある。